

もうひとつの道徳教育研究

——戦後道徳教育の再生と 500 人を越える学年道徳の試み——

加藤 一雄

I 崩壊の時代の道徳と規範意識

1. 十五歳の悲鳴が聞こえる

横浜市の公立中学校で「生命と生きがい」について調査をしたことがある。そこには、次のような言葉が綴られてあった。

- ・ふと自殺したくなる時がある。(21%)
- ・生まれてこなければよかった。(15%)
- ・何のために生きているのかと思う時がある。(36%)
- ・この世の中は、うそとごまかしばかりだ。(31%)
- ・学校がいやだ。休みたい。(29%)
- ・親なんか、いらぬ。(36%)

なんと悲しい声だろう。この中学生の悲鳴を、親や教師はどのように受け止めたらよいのだろうか。

昭和 61 年(1986 年)3 月 10 日の読売新聞・全国世論調査によると「学校に不満」が 7 割を超えた。不満の内訳や改革を求める理由としては、「いじめ」が最も多く、続いて「教師の質」、「校内暴力・非行」、「詰め込み教育」の 38% などが挙げられ、「道徳教育の充実」も 36% の高率を示していた。

それから、17 年後の 2002 年(平成 14 年)、朝日新聞・全国世論調査を見ると、詰め込み教育に代わって「習熟度別授業」の支持が 62% あり、「しつけのほか、道徳教育や生徒指導が不十分」が 49% であった。「みんな一緒、一律の教育」から「違いを前提にした教育」への転換がうか

がえる。

2. 問われる日本の教育

アメリカの雑誌『ニューズウィーク』のアジア版¹⁾、1996 年 12 月 25 日号によると、物質的欲望に駆られて手っ取り早くお金を稼ぐため何のためらいもなく援助交際、テレホン・クラブなど性風俗に走る「普通の」女子中学生や女子高校生の姿が報じられた。また、1998 年 11 月号²⁾では、都市郊外の住宅地に育つ少年たちに犯罪が急増しており、学校へ行く意味を見出せず、将来の展望ももてない闇をさまよう子どもたちの増加は、「日本の社会に何かが狂い始めた」ことの兆候であると述べている。

日本の社会の、何が、狂い始めたのか。

外国のメディアが指摘するまでもなく、2000 年(平成 12 年)2 月 5 日の産経新聞は、2 段抜きで「日本の子供、道徳観不足」の大見出しで、両親が口うるさくしつけをせず、子供たちは家の手伝いをしないと報じている。

また、文部省(現・文部科学省)の国際比較研究会がまとめた日本、韓国、米国、英国、ドイツ 5 カ国の子供(小 5 と中 2)の国際比較調査では、子供のしつけや道徳観、正義感の育成について不十分な日本の子供と家庭の実態が浮き彫りにされた。驚いたのは、子供の道徳観、正義感に関する項目である。

「いじめの注意」について「何度も注意したことがある」は、米国 28%、ドイツ 25% に対して、日本の子供は 4% と最低であった。さらに、

「友達のけんかをやめさせた」の項目では、トップが韓国で27%、日本は8%。「体の不自由な人や、お年寄りの手助けをした」は、ドイツ22%に対し日本は8%で最も低い。さらに、「目上の人にていねいな言葉を使う」とか「父を尊敬している」という人間関係の基本的マナーについての肯定的回答でも、日本の子供は5カ国中最低の割合であった。東洋の礼の国も落ちぶれたものである。

日本の子どもたちの生活のなかで、いま、一番欠けているものは、「勤勉さ」、「誠実さ」そして「まじめさ」である。まじめに生きようと考えない。ただ、面白ければいい。だから、まじめに行動しようとする、「ブリッ子」と揶揄され軽蔑される。放課後の掃除当番でも一所懸命にやるまじめな子が仲間はずれにされ、勤勉な子どもが「いじめ」の標的とされる。どうして、このような子どもたちが増えてきたのだろうか。

平成10年(1998年)、中央教育審議会から『新しい時代を拓く心を育てるために』～次世代を育てる心を失う危機～と題する答申があり、そのなかの第1章 未来に向けてもう一度我々の足元を見直そう一の3ページ(資料1-1)で恐ろしいグラフを見た。³³⁾

「日・米・中国の高校生の規範意識」を調べたもので「本人の自由でよい」と回答したものの割合は次のとおりである。

	日本	米国	中国
・先生に反抗する	79%	15.8%	18.8%
・親に反抗する	84.7%	16.1%	14.7%
・学校をずる休みする	65.2%	21.5%	9.5%

じっと、この数字を見ていただきたい。

この数字の背後に、何が現れて来るだろうか。これが、日本の青少年の実態である。

このような子どもに、誰がしてしまったのか。何が彼らをここまで追い詰めてしまったのか。

いま、不登校の小・中学生は12万7964人。前年度比3万2000人と急増している。また、校内暴力は前年度比25.1%の増加。中学校における

対教師暴力は47.6%の増加。器物破損に至っては、中学校40.8%、高校52.9%増とすさまじい。まさに、教育崩壊の状況にある。「学級崩壊」「家庭崩壊」を教育評論家の尾木直樹氏は「教育と子育て困難な状態」と定義づけた。

特にこの数年、子どもの荒れ方がひどい。日本の敗戦直後は、飢餓状態のなかで子どもたちの窃盗や虞犯行為などの「生活困窮型非行」が見られたが、現在は飽食の時代の「遊び方非行」が見られる。前者は特定の子が、貧困ゆえの犯罪や問題行動を起こしていたのに対し、後者の特性は、非行や問題行動を起こす子どもの多くが非行歴も警察の補導歴もない「フツー」の子たちである。学校では学級委員長や生徒会役員が事件を起こして社会を騒がすことも珍しくない。怖いのはフツーの子だからこそ、「キレル」と何をしてもかすか分からない。警察庁が「いきなり型」とか「突発型」と呼んでいる暴力スタイルである。日々報道される事件も陰湿で凶悪になってきた。どうして日本の子どもたちは基本的なマナーを忘れ、外国の子供たちと価値観を共有できなくなってしまったのか。

ひとつには、「自己中心的な親がいて、子供がいる」ことが考えられる。自己中心の子供の特徴は、単線型でわがままだから自分以外の相手の立場や痛みを考え、感じるができなくなってしまった。

次は、なぜ、いま、ここにきて、「日本の家庭と学級が崩壊してしまったのか」ということである。これも一概には言えないけれども、そのひとつとして、道徳反対を叫ぶグループの尻馬に乗って「自己の権利」だけは主張したが、具合が悪くなると責任は取らない、不正を見ても、見ぬふりをして通り過ぎるという大人が許容社会を作ってしまったことに原因があるのではないだろうか。さらに、学校での道徳教育を否定し、日の丸を引き摺り降ろし、道徳的価値観の教育を忘れた親と教師たちの姿の裏返しだが、いまの日本の子どもたちの姿のように思えてならない。

3. 戦後の道德教育（昭和33年まで）

戦後の道德教育が、どのように扱われたかを調べてみよう。終戦から「道德」の時間が特設された昭和33年までと、それ以後とに分けて考えるのが妥当であろう。

昭和20年12月31日に連合軍総司令部は、「修身科、国史科、地理科の中止についての指令」を発した。これらの教科が軍国主義や極端な国家主義の温床になっていたと考えられたからである。これによって国史、地理同様、教科としての修身教育も廃止されたのである。⁷⁾

やがて、昭和21年6月29日に地理科が再開され、同年10月12日には日本歴史の再開が総司令部から許可されたが、修身科の再開はなかった。しかし、価値観が大きく転換する時代に新しい道德を新しい方法で教える必要を痛感する教師たちもいた。

昭和20年、文部省内に「公民刷新委員会」が設置された。東京大学教授大河内一男、和辻哲郎らが名を連ね、「修身」と公民的知識とを一体化した「公民科」を学校教育のなかに新設すべきだと主張した。

公民教育の精神については、道德は本来個人の道義心の問題であるが、同時にそれは、社会における個人の在り方の問題でもある。したがって、主として内心の問題を扱う修身と、社会に於ける個人の在り方を追求する公民科を一本に統合して「人間の社会に於ける在り方」として礼儀正しい日本人の育成を目指した。しかし、「公民科」設置は実現しないまま22年度は教育制度が変わり、国民学校は廃止されてしまうのである。しかし、新制度による小・中学校の教育課程には、公民科も修身科も設置されないものの、新たに社会科が新設され、公民教育＝道德教育という構想は受け継がれた。⁸⁾

昭和25年、第2次アメリカ教育使節団が来日。「道德教育は、全教育課程を通じて、力説されなければならない」との勧告を受け、学校教育全体で行うという「全面主義道德教育」⁹⁾が始まる。

道德の時間は特に設けられず、生活習慣の形成など“しつけ”の指導は「生活指導」として各学校で行われていた。生活指導といっても、生活綴方や生活作文と結びついたものがあったり、校外補導として非行から守る生活指導や、ホームルームにおけるガイダンス・カウンセリングの役割も果たしていた。¹⁰⁾

特に連合国の軍事占領が終わった昭和27年になると、アメリカ中心教育の影響が後退し始め、ソ連や中国の教育に関心をもち、「集団指導」を重視する教師が増えていった。ソ連の教育学者A・C・マカレンコの著書『愛と規律の家庭教育』が翻訳されて、その影響もあり生活指導は集団主義でなければならないと主張する教師集団も現れた。

文部省は昭和33年9月、「道德」の時間の特設に踏み切ったのであるが、特設に反対する教師たちは、独占資本主義への抵抗運動として政治的な生活指導論を展開した。この「集団指導」の思想は、明確に集団が個に優先し、個は集団の中に埋没せしめられるという考え方をする。

たとえば、学級では子供たちを組織して、ひとつの堅固な集団に作り上げる。そのためには、集団のきまりを定めて、そのきまりを堅く守らせ、もし、きまりに反するものがあれば「つるしあげ方式」とか「仲間はずし方式」によって子供を罰し、こらしめた。こうすればどんな子供でも集団に服従し、忠実になる。要するに生活指導の目的は、小学校の段階から政治的な人間変革を行うこと、革命的な児童を教育することにあったのである。¹¹⁾

4. 横浜の「道德」と特設前後

(1) 昭和33年の幕開け

「道德反対、修身反対、戦争反対!」。クルマの上からマイクを持った浜教組（横浜市教職員組合）のリーダーが叫び、動員されたデモ隊の組合員（教師）がこれに唱和する。「修身反対、道德教育、絶対反対!」

この年、教育現場では勤務評定反対運動が展

開されるなかで、文部省は道徳教育実施要領を
 通達した。これが引き金となって「道徳の時間」
 の特設をめぐる文部省と日教組は激しく対立し
 た。

昭和 30 年代の横浜の教育、とりわけ道徳教育
 と「道徳の時間」に対する取り組みはおおよそ次
 のようであった。

この時期（昭和 33 年）は、横浜市にはまだ道
 徳教育研究会はなかった。横浜市生徒指導研究
 会の中に特別教育活動部とカウンセリング部が
 設置され、これに間借りをする形で昭和 35 年に
 道徳部が新設されたのである。

私事で恐縮だが、筆者が横浜市立の中学校に
 着任したのは昭和 29 年 4 月。当時の初任給は
 8,700 円の時代である。前述したように、全面
 主義の道徳教育の時代である。多少重複するこ
 ころもあるが、手元にある古いノートや資料を
 もとに戦後の道徳教育の歴史を中央省庁と横浜
 の動きを筆者の記録を基に抜粋してみよう。

昭和 20 年、太平洋戦争終戦直後の朝礼で、
 「GHQ（連合軍総司令部）から教育勅語とともに
 修身科は廃止された」と校長が悲しげに話すの
 を聞いた。そして、次の日から教室では教科書
 に墨を塗る日が続くのである。改めて敗戦を実
 感した。

昭和 24 年、「吉田茂首相は、教育勅語に代わ
 るものとして、『教育宣言』または『教育綱領』
 の制定を考え、哲学者・天野貞裕に対し、三顧
 の礼をもって文部大臣として迎えた」と当時の
 新聞は報じている。

天野文相は『国民実践要領』を提示したが、賛
 否が分れ、在任中は実現されなかった。しかし、
 アメリカの第 2 次教育使節団は報告書「Mission
 Report」により、道徳の全面主義を指示したが、
 「這い回る道徳教育」といわれて日本では定着
 しなかった。そこで、文部省は昭和 26 年、「道
 徳教育振興方策」を打ち出して手引書の作成に
 取り掛かった。

昭和 33 年、教育課程審議会の答申を受け、文
 部省は『道徳教育実施要綱』を公表。『道徳の時

間』を学習指導要領に位置づけた。それも、教
 科ではなく領域として、毎学年、毎週 1 単位時
 間、年間 35 時間継続して指導するものと義務
 づけたのである。（文部省令 25 号）

新設された『道徳』の時間は、修身科復活の
 誤解を与えないよう配慮され、教科書は用いず、
 評価もつけず、指導も専任教員でなく学級担任
 とした。「道徳の時間」は、全教育活動で行われ
 る道徳教育を補充・深化・統合するものとして
 登場したのである。

この特設に対して、日教組は真っ向から反対
 した。反対の主な理由は、①公権力が国民の道
 徳、良心の自由に干渉するのは納得できない。
 ②従来の教育活動全体で行う前面主義でよい。
 ③生活経験を重視した「生活指導」で十分。な
 どであった。

これに対して文部省は、昭和 38 年『道徳教育
 の充実方策について』を公表。教師用指導資料
 を始め、児童・生徒に適切な読み物資料の活用
 をうながすなど現職教育の充実、校内体制の確
 立を呼びかけた。中央のこのような動きのなか
 で、横浜市教育現場はどのように取り組んで
 いただろうか。

（2）横浜の道徳・黎明期の取り組み

横浜市教育委員会の『研究集録』を調べてみ
 ると、「昭和 29 年以来、道徳教育の徹底を指導
 の重点においた」とある。まだ、特設以前のこ
 とである。そして昭和 33 年には、『道徳指導計
 画の手引き』を作成、刊行している。さらに、
 34 年度はこれを改正。35 年度は『横浜市中学
 校教育課程・道徳編』を市内中学校に配布した。

昭和 35 年は横浜市中学校生徒指導研究会のな
 かに道徳部が新設されたのを契機に、夏休みの
 3 日間「横浜市中学校道徳教育研究集会」¹⁰ が
 開かれた。研修会は 3 分科会に分かれ「道徳教
 育のあり方」をテーマに問題点を洗い出した。

第 1 分科会は「道徳教育の基本的なあり方に
 関する問題」を協議した。なぜ、学校で道徳教
 育を教えなければならないのか。生活指導とど

こが違うのかが争点となった。

第2分科会は、「指導計画および指導内容に関する問題」が取り上げられた。生徒の発達段階に応じて1年「習慣化」、2年「内面化」、3年「社会化」というが、具体的にどう指導したらよいのかとの質問が相次いだ。

第3分科会は「道徳の指導方法」がテーマであった。「道徳」の時間という用語になじめない教師たちは、従来のロングホームとかショートタイムという言い回しを使って発言する。道徳は、週2時間のホームルームを充実発展させるためにあるのだから、あとの1時間を道徳的内容を含んだものとして扱えばよいのだろうという発言も聞かれた。とても具体的な指導方法までは深まらなかった。

しかし、それでも昭和37年になると、様子が少し変わってきた。夏休みの道徳教育研究会には120名が参加した。

這い回る経験主義や過激な集団主義から脱皮したいと考える教師たちによって、「道徳」の指導過程の基本形らしきものが作られ発表された。

- ・導入では「気づく」段階。現実の問題を多面的に捉えて話し合う。
- ・展開では「考える」段階。教師の説話を中心として、広く社会認識の上に立って考えさせる。
- ・終末は「態度化」を図る。道徳的実践の段階として、「自分だったらどうするか」を追及する。この次元は、まだ教師主導であるものの一応、道徳の授業形態らしきが見えてきた。

これに対応して、横浜市立小学校の道徳教育研究会では「道徳の時間」の指導過程を6段階に場面分析している。

①問題の意識化、②問題の分析、③価値批判④適応行動の発見、⑤障害点の発見、⑥意識の高揚を挙げた。

このような地道な研究が続けられるなかで、特設道徳の批判に対して、生活指導とは違う、道徳教育でなければできない指導観が明確にさ

れていった。

昭和40年というと東京オリンピックが終わり、「期待される人間像」の中間答申が出され、論議を呼んだ年である。

横浜では道徳教育で最初の公開授業が行われた。横浜市教育委員会から道徳教育の指定を受けた城郷中学校を会場として道徳の研究発表会が開催されたのである。研究主題は「道徳時間における主題に即応した指導過程」の研究。ここで注目されたのは、「城郷方式」と呼ばれる指導形態であった。

城郷方式とは、

- ①問題点を体感すること—自己とのかかわりにおいて問題点をとらえる。
- ②問題点を理解すること—内面的な自覚の有無を取り上げる。
- ③心情過程と理解判断過程を明確にする—自己中心の情報を社会的な心情にまで高め、動機と行為と結果との因果関係を理解する。

(中略)

- ⑥落差を埋める条件の理解—理想的な姿を追求するとともに、現実の生活との落差を分析追求する。¹⁰⁾

この城郷方式は、当時としては他に例を見ない独自に開発したものであった。1主題の展開に当たっては、多時間扱いによる主題を取り入れている。指導計画を見ると、第1時限は導入的段階。第2時限・3時限は展開的段階として設定、授業に厚みをもたせる。そして第4週に当たる第4時限を終末的な扱いの時間として主題のまとめをするという指導計画である。

現在の道徳の時間というと、1主題1資料、1時間という細切れ授業にパターン化された傾向がある。このようなステレオタイプから脱皮するときには、30年前に開発された横浜の城郷方式をもう一度見直してみてもよいのではないか。

(3) 浜教組の教研集会

昭和30年代は政界、教育界がともに揺れた年であった。昭和30年に自由党と日本民主党が

合同して自由民主党が結成され、教育界では教育三法をはじめ、『期待される人間像』が公表された。これらが「道徳の時間」の特設反対に拍車をかけることになる。

昭和40年1月18日の朝日新聞は、福岡市の日教組第14次教育研究全国集会の模様を次のように伝えている。

「文部省と日教組の果てしない争いの渦の中で教師たちは悩み、あせり、戸惑っている」という書き出しで、宮之原貞行委員長（当時一筆者注）は「期待される人間像を修身科の復活と決めつけ、正しい人間像を明らかにしようと呼びかけたが論議が沸かず、多くの先生方は批判をためらい思い惑うふうであった」と述べている。

また、道徳については「押し付けの道徳に抵抗するのか、それとも、子供たちに規律を決めさせ、みんなに従わせるといふ集団主義教育を取り入れるのか」に論議が沸いた。

昭和49年3月に浜教組が開催した神奈川支部教研集会の記録が手元にある。見ると、助言者を囲んで次のようなやり取りが行われていた。

- A 学校で道徳をやるのは疑問だ。父母や身近な人がやればよい。
- B 道徳を押し付けられたら、その内容を空洞化してしまえばよい。
- C 小学校だが、テレビだけでやっている。資料はあっても使わない。
- D 生徒との結びつきが大事なので、道徳の時間は雑談やレクリエーションをしている。これが広い意味の道徳だと思っている。

そして、最後に助言者は次のようにまとめた。「私の学級でも、道徳の時間は特設していない。とにかく、文部省から押し付けられて、いやいや、やっているのが実情です」。

(4) 横浜市立中学校道徳教育研究会の発足

横浜の中学校に待望の「道徳教育研究会」が生徒指導研究会から分離独立して、昭和42年の春、正式に発足した。

設立趣意書は、このときの状況を次のように述べている。

「昭和33年、道徳の時間が設置されてより9年。市内中学校における道徳教育の実践は各校の苦心と努力によって幾多の問題や壁を乗り越え、ようやく軌道に乗ってまいりました。」（以下略）

昭和25年、横浜市生徒指導研究会に道徳部を新設して以来、40年には道徳幹事会を設置するなど、区内の研究会の組織づくりに奔走した。

発足と同時に専門委員会を設け、主題検討委員会、資料検討委員会が研究の両翼を担った。

研究に着手したといっても、手がかりになるものは「赤本」¹¹⁾「青本」¹²⁾と呼ばれる2冊の手引書だけである。これは、横浜市教育委員会が39年に編集した『中学校道徳指導の手引き—資料を中心として—』と、41年発行の『中学校道徳指導の手引き—指導過程を中心として—』だけを頼りに研究は始められた。どちらも資料と主題は精選されてはいたが、指導過程は十分とはいえなかった。さきに城郷方式が発表されていたとはいうものの「横浜らしさ」というには、まだ改善の余地が残っていた。

そこで、指導主事を囲んで研究会の委員が指導過程の基本形作成に取り組んだ。¹³⁾まず、指導の基本形は「基点」、「焦点」、「変容」の過程に分け、「非本来的人間性のあり方」から、ズレを自覚する際の葛藤を通して「本来的人間性のあり方に目覚める」という格調の高い展開である。これは、指導計画でいうと1時限で「非本来的人間性のあり方」（弱い自己・あるがままの自己）を追求し、第2時限で「本来的人間性のあり方」（こうありたいと願う自己）に気づき、高める方向を示す。¹⁴⁾人間の二面性に基づいた新しい指導過程として注目されたが、「学者の理論は難解すぎる」との声もあり、現場には定着しなかった。

このころ、生活に密着したデューイの経験主義をはじめ、ユング、ボルノーの心理学化的集団教育、コールバーグ、エリクソン、バンデュー

ラなどの道徳理論も紹介されたが、いずれも一部の道徳教育の研究者を育てたものの、広く日本の教育現場には根づかなかった。かえって「道徳は難しい」「分からない」「道徳は教えられない」という先入観を与えてしまった面もある。¹⁵⁾

1994 年（平成 6 年）の日本経済新聞を見ると、『道徳教育を進めたい文部省・消極的な学校』という見出しで、道徳時間の年間標準時間を下回る学校が小学校では 42 %、中学校は 75 % もあることが分かった。文部省が 10 年ぶりに実施した道徳教育に関する全国調査によると、つぶした時間は、小学校では「算数や国語など教科の時間に当てた」とする学校が最も多く、中学校では学級活動、学校行事などへの振り替えが目立った。「学校の週 5 日制が導入されたため、教科書がない道徳の時間が削減の対象になった可能性も高い」と新聞は報じている。

II ティームティーチングによる学年道徳

昭和 60 年代では、まだ道徳の時間に教師がティームを組んで道徳の時間を行うなどということは考えられなかった。¹⁶⁾

道徳の時間は学級担任が一人でやるもの。そして、1 時間 1 主題 1 資料という指導法が主流を占めていた。もちろん、主題のほかに副主題を設けたり、多時間扱いの指導計画とか中心資料に対して補助資料を用いる授業も見られたが、全校的な広がりは見られなかった。

このような時代に、学年がティームを組んで道徳授業を研究・推進している中学校があった。

昭和 60, 61 年度にかけて研究の成果を発表した横浜市立岡野中学校と 62 年度の横浜市立末吉中学校である。

1 岡野中学校の学年道徳実践事例

岡野中学校の実践については、昭和 61 年（1986 年）11 月 24 日の日本教育新聞に概要が正確に報道されているので、その記事¹⁷⁾を転載し、研

究発表の様子を紹介する。

学年から学級へと
教師と生徒の生きがい 話し合い

横浜市立岡野中学校（小関昭三校長）の道徳教育の研究発表会が 11 月 6 日に行われた。研究主題は「人間の生き方にふれる教育を、道徳の時間を中心として他のあらゆる領域で考え実践する—思いやりのある、人間性豊かな生徒の育成をめざして—」とされた。

同校の研究は、60, 61 年度横浜市教育委員会研究協力校の指定を受け、進められてきた。昨年度は TT の手法を取り入れた「学年道徳」の中間発表をしたが、今回はそれをさらに深めた「学年道徳」の発表会である。

各学年ごとに共通の主題を設定し、身近な題材を手作りの資料として活用しているのが特色であった。

1 学年の主題は「生きがい」。1 時限目は学年道徳の集会を開き「生きがい」について話し合わせる。それを受けた 2 時限目で、各学級ごとに社会人としての生きがいを求め「カモメのジョナサン」のビデオを見て、「自らの生きがいを探り出そうとする 1 羽のスーパーカモメの物語を通し、人間としての生きがい」を見い出させている。また、この「生きがい」を求める際には、世の中にはさまざまな考えがあることを理解させて、他に学ぶ広い心を育てている。

2 学年では「岡野で働く人たち」の主題で、学区内の駅員・警察官など身近な人たちとのインタビュービデオを自主制作し、多くの職業につく人々がそれぞれ社会に貢献していることや、働くことの意義を理解させていた。

3 学年の主題は 1 学年と同じ「生きがい」だが、進路について関心が高まるこの時期に合わせて、働くことや、真の幸福について社会人として考えさせ、誇りや生きがいを理解させていた。

また、特殊学級では「働く喜び」と題してアリとギリギリスから題材をとり、紙芝居を作り

ながら物語の心情に触れ、働くことの尊さに感銘する心を養わせている。

横浜市教委の加藤一雄指導主事（当時一筆者注）は指導講評で「学年集会で道徳の時間を設定しても、ただ単に学年主任（マスターティーチャー）が何か話して、それだけで道徳の授業をやりましたと言うのではなく、生徒と教師が一体となり、たとえば“生きがい”について話し合う。その時に、他の教師はサプリーダーとなって“学年道徳”を盛り上げていかなければ意味がない。今回の発表は各学級に戻ってから“学年道徳”で話し合われたことをさらに深めていく。そのための“学年道徳”であり”学級道徳“である」と語り、参加した先生方も熱心にメモを取っていた。

2 末吉中学校の学年道徳実践事例

次に横浜市立末吉中学校の学年道徳の研究と実践を紹介しよう。末吉中学校は東に京浜工業地帯、西に箱根、大山、丹沢の連山を望み、緑の県立三ッ池公園を眼下にする丘陵に位置している。

昨年までの岡野中学校の研究を継続・発展させる形で、昭和62年度横浜市教育委員会教育課程（道徳）研究協力校として校内に研究委員会を発足させた。

（1）研究主題の設定

研究主題は「発見と共感の行き交う学年道徳の展開」。副主題として～自己と他者の体験から互いによさを発見し、よさに共感する～とした。

主題設定の理由として、学年道徳は同一目標達成の実践課程における楽しさ、よろこび、努力、感動を共にする学年集会の機能を道徳の授業に組み込むのである。学年全員が一堂に会するとき、同学年に所属しながらも、ふだん接することの少ない友人と教師と隣り合わせになる。そこには集う数だけの考え方や感じ方があり、そこで語られる体験は、他者のよさの発見となる。また、他者への共感を呼び起こす。さらに、

「聞く姿勢」として、自分の考えと重ね合わせながら聞くこと。「話す姿勢」としては、自分の気持ちを自分のことばで言い切る学習を重ねることにより、自己を見つめ、自己を自覚することが可能となる。

このような学年道徳における考えを多時間扱いの道徳の授業に位置づけ、「補充」から「深化」へと繋ぎ学校教育目標の具現に向けて取り組んでいった。

研究計画を作成する段階で、筆者は本校の推進委員と次のことを確認した。

学年道徳の指導計画は3時限扱いを原則とする。3時限のうちの1時限は学年道徳とし、残る2時限を学級での道徳の時間とする。その組み合わせは、学年の実態に一任する。たとえば、

A型第1時限・気づく（共通化）＝学年道徳

第2時限・深める（個別化）＝学級道徳

第3時限・見つめる（内面化）＝学級道徳

B型1時限＝学級、2時限＝学年、3時限＝学級

C型1時限＝学級、2時限＝学級、3時限＝学年など多様な扱い方が考えられよう。

A型の場合は、第1時限の「学年道徳」の時間に＜意識の共通化＞を図り、本時の主題（ねらい）にかかわる問題の所在に気づかせる。ここでは、学年の実態に即して多様な考え方や感じ方を引き出し、在るべき方向を探る段階である。したがって、無理に結論を出したり、まとめる必要はない。学年所属の教師による体験談など、教師再発見の機会として本時で得た感動や葛藤を自分のものとして学級に持ち帰る段階である。

第2時限の「学級」での道徳の時間は、＜深める＞段階である。前時の学年道徳の授業を受け、主題とのかかわりから読み物資料または視聴覚資料を用いて、資料のなかの主人公の生き方と自分を重ね合わせるのである。このとき、学年道徳で語られた先生方の話や仲間の考え方を想起しながら授業が展開されるので、従来の単発的な週1時間の道徳授業より深まりが感じられる。

第 3 時限の「学級」での道徳の時間は、＜見つめる＞段階である。自分を見つめ、もう一人の自分・自己と語り合う時間である。これまで語られてきた問題に対して、「自分だったら、どうするだろうか」、「どのように動くだろうか」と自分の体験を通して自分を見つめるのである。第 1 時限の学年道徳で＜意識の共通化＞を図ったものを、2 時限は＜個別化＞し、そして、本時の＜内面化＞につなげるのである。ただし、内面化といっても、他人の目を必要以上に気にする思春期の生徒には、無理に発言を促したりしないで、あらかじめ用意しておいた「道徳ノート」や「心のノート」に、ありのままの自分の考えを鏡に映すように記入させるのである。

したがって、B 型の場合は第 1 時限は「学級」で資料を通して問題の所在に気づかせ、2 時限を「学年道徳」で深め、3 時限は再び「学級」に戻って自己を見つめるとなる。C 型でも 1, 2 時限を学級で耕しておけば、第 3 時限の「学年道徳」ではチーム・ティーチングやロールプレイングなどを活用して内面化を図ることが可能である。

末吉中学校における学年道徳は、このチーム・ティーチングとロールプレイング（役割演技）を多様に組み入れた研究を特色とした。

チーム・ティーチングを活用すると学年道徳において学級担任のほかに学年所属の教員を巻き込み、複数の教員で効果的に道徳の時間を展開することができる。資料提示の協力、話し合い活動の協力、グループ活動の協力、役割演技の協力など授業の進行役と子どもへの対応役を分担して、状況に応じて多様に工夫、展開することができる。

また、本校が役割演技（ロールプレイング）を道徳授業の中へ積極的に取り入れた理由は、本来、道徳教育は人間のドラマであり、役割演技も人間のドラマである。人間を演じる以上「役割」とは、具体的な人と人との人間関係のなかで、おのずから生まれてくるものである。したがって、役割の日常的な意味は「…らしくふる

まう」ということであり、「…の立場になって考える」ということである。たとえば、「親の役割」を与えられたことによって、親の立場や気持ちがよく分かり、「子供としてどのように振るまったらよいか」に気づくようになる。親の気持ち、子供の気持ち、周囲の人の気持ち、障害のある人の気持ちなど、その気持ちのなかに自分の身をおいてみて、自分の判断や行動が創り出されるところに役割演技の特質がある。

したがって、日常生活がドラマであるのだから生徒の生活体験はそのまま役割体験ということになる。そこで、準備されない即興的な演技は、生徒の平素の物の見方や考え方、感じ方などがよく反映されるので、日常気づかなかった自分に気づいたり、級友に対する理解を深めたりするときに有効にはたらくのである。

昭和 63 年 2 月 6 日の課題研究発表会に向けて吉田三郎校長、野沢義弘副校長、長尾光俊研究推進委員長を中心に発表の形態を協議した結果、「役割演技と教師の体験談を組み込む学年道徳」のテーマを全職員で決定した。さらに、役割演技を取り入れるに当たっては『横浜市道徳指導事例集』を参考に、次の留意点を全職員で確認した。

（2）役割演技

①役割演技の留意点

「劇をやろう」とか、「うまく演じよう」という気負いを持たさないようにし、与えられた特定条件や場面の中で、素直に役割を演じる姿勢を大切にすること。

ア 生徒が興味本位に流されないよう、ねらいを明確にし、問題点をしっかりとらえておくようにする。

イ できるだけ多くの生徒が演技者になるよう配慮すること。

ウ 取り上げる題材は、十分吟味すること。

エ 常に集団が暖かい人間関係によって結ばれ、お互いが親和感を持って生活できるような雰囲気を作っておく。

②役割演技を取り入れる主題の要件

- ア 参加者（観衆）の関心が高いこと。
- イ 参加者の共通体験があること。
- ウ 表現が容易であること。
- エ 発達段階にふさわしいもの。
- オ 新しい発見と、改めて見直すことができるもの。
- カ 道徳のねらいに沿ったテーマを設ける。

③役割演技の技法

役割演技（ロールプレイング）の方法は、いろいろあるが、学級ですぐ利用できるものとして、次の技法を参考にした。

- ・再現法—自由な話し合いの中から、状況や場面をそのまま教室で再現する。再現に強い抵抗がある場合は、空想的なレベルに切り替えてもよい。
- ・加入法—一定の状況を構成し、そこに演者を次ぎ次に引き入れていく。4～6人のグループ構成で、主題に即して状況と役割を演じる。
- ・交代法—演ずる者が「役割を交代」して進行させる。
- ・移動法—単純な役から複雑な立場の役へ状況を変える。録音、録画、スライドなど視聴覚教材を併用すると効果的である。

これらの技法等を活用して学級単位で役割演技による授業研究を実践し学年道徳に備えた。

(3) 500人を越える2年生の学年道徳

紙数の関係で第2学年の事例を取り上げる。

学年道徳は、次のような形で授業を展開した。2学年の男子は298名、女子229名、計527名である。この500人を越える12クラスの生徒が体育館に集まった。横浜市はもとより日本最初の500人を越える学年道徳が開かれたのである。

学年全員527の顔がお互いに見えるように、全員が床に扇型に座った。この状況を想像していただきたい。

扇型の中央にマスターティチャーが位置した。主題は「人間愛」。「人間このすばらしきもの」に迫る。マスターティチャーは中央で全体の進行役をつかさどり、サブティチャーは役割演技の司会を務める。他の先生方はクラス別に生徒のなかに入って座り、生徒の話し合いを助ける。

まず、マスターティチャーが本時の流れを簡単に説明した後、弱視学級の学習風景を映し出したスライドを見せた。同時に児童たちの声のテープも聞かせる。527人が静かに聴いている。マスターティチャーに促されて、数人の生徒がマイクを持って「障害に負けない笑顔の努力」について感想を述べ合う。

続いて、サブティチャーの進行により、役割演技が始まった。「電車内で目の不自由な人と乗客」の役割を生徒が演じたあと、その役割を次の生徒が交代して再演する。第三者の立場で聞いていた生徒が「自分だったらなんと言うか、どうするか」と問われると、目の不自由な人の生徒役に向かって優しい言葉かけをしていた。

終末は2人の先生の体験談で締めくくる。いじわるをして相手の心を傷つけてしまい、今も後悔しているという子供の頃の話聞き、相手の立場に立つことの難しさと思いやりの大切さを改めて学んでいた。

学級を中心とした道徳の授業から、学年が一堂に会しての道徳の授業展開は、生徒に新鮮な印象を与えた。普段、聞くことのできない友人や教師の話す感想は、新しい発見と共感を生み、その後の道徳の授業に引き継がれ生徒の意識を高めていた。また、学年を中心とした行事や体験に取り組む意欲の土台ともなり、学年の隠れたよさを知る機会ともなった。

荒れた学校で苦勞してきた教師集団も学年道徳に取り組んだことによって、それぞれが事前の準備をして道徳授業にかかわり、同じテーブルについて共通理解を深め、合同で学習活動の研究を進めたことで他のクラスの先生方と交流できたことを高く評価した。これは「学年道徳」が学校の活性化にいかにか大きく寄与したかを物

語っている。教師集団がチームを組み、綿密な指導計画と指導形態を配慮して協同するとき、500 人の心は開くのである。

おわりに

今から 18 年前に、この貴重な実践が試みられたことは、あまり知られていない。500 人を越える生徒による学年道徳は、先導的試行といってもよいだろう。まだ、昭和 60 年（1986 年）ころは、チーム・ティ칭ングといっても教育界ではあまり関心をもたれていなかった頃の連携・協力の実践である。

しかし、平成 12 年（2000 年）になると、「小学校および中学校にチームティ칭ング対応教員」という制度ができて、実績をあげれば 1 名が加配されるという時代になった。道徳は常に時代に対応し、時には時代をリードするものである。

21 世紀のスクールデザインは“Time on task”といわれる。これまでは時間に応じて授業を行ってきたが、これからは逆転して、「授業に応じて時間を考える」ことが時代の要請である。総合学習の発想もそのひとつである。これからの道徳は、これまでの禁止や守りの道徳から、変化に対応し生きる力を身につけた攻めの学年道徳のような授業が要請されるようになるであろう。

ナー等を指導する道徳教育を指す。

- 7) 『道徳教育の研究』島田四郎（玉川大学研究部）
- 8) 『道徳教育の歴史』—修身科から『道徳』へ 勝部真長・洪川久子（玉川大学出版部）
- 9) 昭和 36, 37 年度『中学校道徳研究集会記録』横浜市教育委員会
- 10) 『道徳時間における主題に即応した指導過程』横浜市立城郷中学校（昭和 40 年）
- 11) 『中学校道徳指導の手引き—資料を中心として』横浜市教育委員会（昭和 39 年）表紙が赤色。
- 12) 『中学校道徳指導の手引き—指導過程を中心として』横浜市教育委員会（昭和 41 年）表紙が青色。
- 13) 『横浜市中学校教育課程・道徳（資料編）』横浜市教育委員会（昭和 45 年）
- 14) 『道徳教育研究集録』横浜市立宮田中学校（昭和 42 年）
- 15) 『道徳と教育』日本道徳教育学会 297, 298 号
- 16) 『これからのティム・ティーチング』（中学校編）梶田叡一監修（東京書籍）
- 17) 『日本教育新聞社』（昭和 61 年 11 月 24 日）紙上で枠内の見出しをかかげ、報道された。
- 18) 研究紀要「発見と共感の行き交う学年道徳の展開」横浜市立末吉中学校（昭和 62 年）

注（引用・参考文献）

- 1) 『ニューズウィーク』（日本版）1996 年 12 月 25 日号、16～22 頁。
- 2) 『ニューズウィーク』（日本版）1998 年 11 月 18 日号、32～36 頁。
- 3) 『新しい時代を拓く心を育てるために』（答申）平成 10 年 6 月 30 日 中央教育審議会
- 4) 『要説 道徳教育』片山清一（高陵社書店）
- 5) 『今後の道徳教育を考える』間瀬正次（教育開発研究所）
- 6) 前面主義道徳教育とは、学校教育全体を通して行うもので、たとえば、廊下ですれ違ったときの礼から始まって、集団におけるルールとマ